公文書館
8
十二行
8.6.22
終了

新修ハムレット

中央公論社のめる書の教授によると、諸説の大い新修事を発行するに至ったまは旧訳のなる憾みがあるとのわけ、此ハムレットは今から廿年前の旧稿であるので、自分に満足出来ない箇所が多い。

二つには、用語の統一の要、殊に狂言調に関する問題があって、88ページ、

後の諸節と不調和でもあり、現代の諸書には遠くもあらう。

ハムレット前付
ハムレット前付
1
10
20
相馬屋製
明治四十三年度
No. 6
出版
九八八六五四六九月
ルルルル
ビビボボ號號本山

生きてゐるうち、汝譯のせめて修訂だけでもしておきたいと思つてゐるが、汝譯は時日が切迫し過ぎたため、苦心惨憺たるものがあつた。旧版の誤植や誤譯や不適當な解釋や發音の不正確や其他種々の缺點を出來る限り除くことに力めた。旧訳は、それを招信して、第一幕のセリフ調の上に一通り相当を松來しつゝ、一部分は狂言調に流れて物語れるのであつたが、さうした部分は、一部から要口過ぎたのである。

10 20 相馬屋製

No.

され。今日は華文とその調和と形容とを問ひ、再度い古流を聞き馴れた流に改めすべく力めた。その為に個所もあるが、雲霧風が自然であるやうに、自然の例の人は自然しやうな語を言葉の例えば、王妃諫言の場で、別詞だけは、蝙蝠やさる狂猫を荒海苔の比喩に使用してゐる。それを用語では「猫」と「代」てある。又、舞台効果のため、わざと別義に

意味なれば
それぞれ
は「直外方の主」
の「食主」と
こうきゃく
「直外方の主」
なつてしまう
併しながら
ある場合の
話としては
陣営
度は皆改
改訂に際
して市河三喜博士の
教授の集注を参照して
同
同
音韻
名詞の發音は
に協つて、成
ハムレット前付
4
發音法
同
「ハムレットの注釋」
都學東
「ハムレット」の
「直外方の主」
「直外方の主」
「複雑」
「複雑」
意味から言つてもい
第二口調がわるく
No.
10
20
相馬屋製

したがって、譯詞としての調和上、ある場合には、時として、便宜上、調子の部分をヒーローとヒロインとの場合には、ヒロインとヒーローとの場合には、オフィリヤは正しくは、オフィリヤ16が、原文では、前者にてあるべきなれども、原作に添へられたトガキは、場面の説明なのだから、其他すべて、物の動作、出入、其他すべてが、零碎なのだから、それを、後世の記入である。一つは、周囲の事実である。他は、自分の譯詞である。譯詞は、弾き語り、後年の諸説は、奇作ではない詳しいトガキが、書きかえてある。

影響

パムレット前付

敬

る。此あたり、一部分は、
意に引き歪められたものだ、
聞いたことがあるが、自分
を讃美得ない人、その
てある。積りなのである。
だれかだれか、しんな気
答えてのる。規矩を
ろ動くなら、次に
切り止めを得なく
此際、徹底的に
三十九巻全部を通して

ぐらゐの

ならば

とたら

10
20
相馬屋製

No.

用字や送り仮名を
漢字の訓よみの決定しがたいやうな
してまひたいと思ふんなものそのうちに
切迫から、用紙を共信
もう仮名に手入れがもとすぐ
レットをもめ、九を最階
ルビに組って讀んで貰はねばならぬことを
ってまうと御の清書君の諦めを
おく。

ルビが無くては
不便や

パムレット前付
7.
昭和八年六月中旬
鶴海双柳会にて
道

10/20 相馬遺稿